
Boys adventure～少年たちの冒険～

美雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Boys adventure 少年たちの冒険

【Nコード】

N7619Q

【作者名】

美雪

【あらすじ】

ある日、龍王国という農業が盛んな都市で育ったケイが、1枚の写真を 見つける。

自分の母親の存在・・・。

行く先々での出会い。そこから始まる運命へのカウントダウン・・・

あなたの大切なものは何ですか？

今ここから始まる、冒険物語！キット何かを見つけられる・・・

***第1章 始まりの時（前書き）**

【ドスドス】

「こんなもんなかな」

僕は、きれいに耕された土を眺めながら言った。

今日もいい天気だ・・・

＊第1章 始まりの時

「そろそろ戻るか・・・」

僕はいつものように家畑の手伝いをしていたが、お昼時になったため1人家に向かう。

「あー・・・疲れたなあ」

そんなことも呟きながら歩いた。

ああ、そういえば自己紹介が遅れたね。僕はケイ、風音ケイ（ふうおんけい）。ちょっと、いやかなりおかしな名前だけど僕は気にしている。

今はおじいちゃんと2人で暮らしていて、両親はいない。小さい頃からいないからもう慣れたけどね。

「ケイ、何しとるんじゃ。早く飯にするぞ」

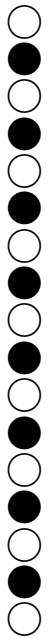
そして今僕を呼んだのがおじいちゃん。
この村で1番偉い人なんだ。

「ケイ!!」

「わかった! 今行くー。」

そのせいで、厳しかったりするんだけど・・・
でも、本当は優しいんだよ!
さ、そろそろ行かないと。

僕は小走りで家へと向かった。



「ごちそうさまでしたー！」

僕は昼ご飯を食べ終え、横になった。

おじいちゃんのお味噌汁は本当においしい。

すると、そんなことを考えながらゆっくりしていた僕の頭の上にヒラヒラと何か落ちてきた。

僕はそれを手に取り覗き見る。

紙切れ？ いや・・・写真？

よく見ると、1枚のずいぶん古びた写真だった。

長い間棚の上にあっただらしく、ホコリもかぶっていた。

そのせいもあって誰が写っているかなんて見えるはずもなかった。

「誰だろう？ 1人は多分おじいちゃん、もう1人は・・・」

僕はそこで言葉を止める。

「え・・・？」

僕は、一瞬思考が停止した。

10年前と言ったら僕がまだ4，5才の頃だし、そもそも両親の顔すら覚えていない。

今さら親がいるって言われても・・・

「まあ、混乱するのも無理なだろう。続きはまた今度話そう、今日はもう畑の仕事はやらんでも良い。ゆっくり心の整理でもするんじゃない」

僕はその言葉を合図に無言で自分の部屋に戻ったのだった。



【チュン、チュン、】

「・・・朝・・・？」

僕はいつの間にか寝てそのままだったらしい、いつの間にか朝になっていた。

「結局、どうするか考えてないなあ・・・」

はあ。とため息をつきながら呟く。

昨日一日考えたが、どうすればいいのか・何がしたいのか自分でも分からなかった。

自分のことなのに、誰かに鍵をかけられたみたいに自分の心が読めない。

「気分が悪いなあ」

そんな自分にムカムカしていたが、さすがに今日は畑仕事をサボれないため起き上がり居間へと出た。

1

「おはようさん、ケイ」

「おはよう。おじいちゃん」

居間へと出ると、すでにおじいちゃん朝食の準備をしていた。

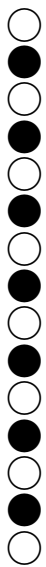
僕は挨拶を交わしていつも通り座布団に座る。

いつも通り・
・
・

「さあ、ケイ。たとと食って、早く仕事に行くんじやぞ」

「分かった。……いただきます」

そして、僕は急いで食べすぐに畑に向かった。



「おはよう！ ケイ」 「おはよう！ 今日の調子はどーだー？」 「昨日はどうしたんだよ」 「ケイ君、いつもお疲れ様」

畑へ向かう途中いつも仲良くしているおばさんやおじさんたちと挨拶を交わした。

何気ない日常。こんな中にいると、昨日聞いたことを忘れてしまいそうだった。

僕はふと思う。何気ない日常、いつも通り・・・

今朝おじいちゃんが何も言ってこなかったのは、なぜだろうか。

昨日のことは、確かに衝撃的だった。

でもまだ全てを聞いていない・・・いや、聞かせてくれなかった。

「おじいちゃんは、僕に気を遣ってくれているのだろうか？」

でも、おじいちゃんはハッキリものを言う人だ。

「ああ・・・もう分かんないや。帰ったらおじいちゃんに聞いてみよう」

僕は考えることを切り上げ、くわを持ち畑を耕し始めた。

日がさんさんと照る中、1人畑を耕す音とともに。



「ふわぁー！ やつと終わった・・・」

それから数時間後、だいたい畑の3分の2の種まき・水まきなどを終わらせた。

昨日の分もあるため、まだまだ午後からもきつそうだ。

もう少しやろうかと思ったが、そろそろお昼時。おじいちゃんを待たすことはできない。

本音を言えば、早くお母さんとお父さんのことを聞きたいのもある。

そのため、家へと向かう足が自然と速まった。

「ただいまー」

「おお、おかえり」

僕は扉を開けて言う。おじいちゃんはやっぱり、いつも通りだ。

そして、さっそくといった感じで僕は切り出そうとした

「おじいちゃ・・・」

「さっ、ちょうど昼飯もできたところじゃ。早くせんか」

が、遮られてしまった。

これは何かある、直感的にそう思った。

かちゃかちゃとお皿の音だけが響く。

おじいちゃんは何も喋らない。さつきも遮られてしまったし、もう意味が分からないよ。

おじいちゃん、一体何を隠してるの？一体何を知られたくないの？

僕の頭はもう限界だった。その時

「ケイ」

「・・・な、何？」

僕はビクツと体を強張らせた。もしかして言ってくれるのかな？期待と、不安が一気に押し寄せてくる。

「・・・早く食わんか。まだ仕事が残っておるんじゃない？」

その言葉を聞いてガクツとなった。

違うのかよ！そう思って、落胆する。

そして僕の期待は押しつぶされ、不安に負けてしまったようだ。

頭の中を不安が駆け巡った。

何で？

何でお母さんのこと教えてくれないの？

もしかしてお母さんは・・・もう、

「・・・」

「どうしたんじゃないケイ」

おじいちゃんは僕が無言になっても、しらをきりとうすらしい。

プツーン

僕の中で何かが切れた気がした。

1—2

バン！！！

その音とともに僕は立ち上がった。

「おじいちゃん・・・何で、何で隠そうとするの?!僕は、僕は・・・」

そこまで言った僕はポロポロと涙を流した。
かっこがつかない。そんなことはどうでもよかった。

「おか、さ、ん、いる、って・・・グスッ、知って、嬉し、かったのに！」

ただ、お母さんとお父さんのこと・・・今までいないと思ってた2人のこと知りたいだけのに。

声はそこでせき止められたかのようにでなくなった。

部屋の中は静まり返り、僕の嗚咽だけが聞こえていた。

「・・・すまないのう」

ポツンと呟いたおじいちゃん。

僕が顔を上げると、何かを決めたかのようにまっすぐと僕を見据え

ていた。

「お前にそんな顔をさせるつもりはなかったんじゃ。許してくれ・・」

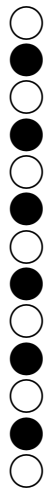
そう言ったおじいちゃんは、本当に申し訳なさそうにしていた。そんなおじいちゃんに僕はブンブンと頭を振る。

『泣くつもりはなかった。だから、そんな顔をしないで』

そう伝えるように。

「それは、10年も昔のことじゃ。お前さんが3才か4才ぐらいの頃かの・・・」

そしておじいちゃんはいっくり話し始めた。



それは、いつもと変わらない日じやた。

「た、大変だ――！――！――！――！大変だ――！――！」

「どーしたんでい？」

「林が、林が――！」

「林がどうしたんでい？」

「林に、ばば……」

「林が何でえ！？はつきり……」

「待たんか、そんな急かしては聞けるもんも聞けんじやろう！さあ、落ち着いて話すんじや何を見たんじや？」

「は、はい。それがおいらにもよく分からないんです。何か大きいくて、黒い……あれは化けもんだ！仲間が、仲間が……！！！」

「分かった分かった。緒多恵さん、こやつを頼む」

この時はただの熊か何かだと思っと思ったんじや。
だがそれが甘かった。

その日は、村の中に被害がなかったうえに襲われたと言う者たちも

怪我をしとったものの無事帰ってきた。

そのため、熊が下りて来て暴れたただけだろうと定義ずけてしまった。

次の日もいつもと変わらない朝を迎えた。

一晚経っても何もなかったためか村にも、いつもの活気が出てきていたんじゃない。

しかし、やはり安心できないともあり皆落ち着かないようだった。

そして、その日は朝早くから村の数人で熊用の仕掛けを林の中に置いておいた。

だが・・・

昼、夕と時間を重ねていっても何も起こらなかった。

朝早くから仕掛けた罠にも。

そこで気づくべきじゃったんじゃない。

1人の老人が帰ってきていなかったことに・・・

そして、翌日に悲劇は起こった。

「キャー！ー！！！！」

それは突然のことじゃった。本当に・・・

皆が朝食の準備に取り掛かっていたとき、叫び声が聞こえたんじゃ。駆けつけてみると、そこには無残にも殴られたような切り刻まれたかのような傷をたくさんつけた行方不明だった老人が横たわっていたのだ。

その老人は早急に治療したが間に合わなかった。

その日からだ、1人また1人いなくなっては殺されて戻ってくる。

まるで誰かがこの町を地獄へと導いて行くかのようにだった。

「町長、絶対おかしいですよ！毎日毎日1人いなくなっては・・・死体で返ってくる。一体何が起きているのか調べましょう！」

「・・・わしも、分かん。なぜ老人を中心に狙われているのかも。だからと言ってむやみに動いてまた犠牲者が出ては・・・」

「もう犠牲者は嫌というほど出ているじゃないですか！町長は、助きたいと・・・町を救いたいと思わな・・・」

「思っとるわい！・・・だが、何がここを脅かしているのかわからん状況でどうしろというんじゃ！わしはもう、誰一人として失いたくはない・・・」

この時のわたしは、冷静さが欠けてしまっていた。

だが、しょうがなかったんじゃ。

言い訳にすぎんかもしれないが、人がどんどん消えていく。

その原因が分からない。時間だけが刻一刻と過ぎ、焦りも生まれた。

もう限界だったんじゃない。

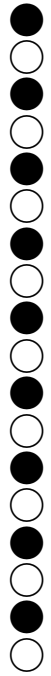
そして、それを畳み掛けるように事件は起こった……

史上最大で最悪と思われる・・・

あの事件。

その名を・
・
・

Under the last world. (最後の世界)



「その名の通り、わしの知る限りの町や村、大都市にいたるまで破壊され・・・どういう意図か分かんが、女子供は全員片っ端から連れ去られたんじゃ」

話が終わり、シンと部屋が静まり返る。

10年前に起こった事件“Under the last word.”

襲われた町や村、大都市・・・
殺された、仲間。

僕の頭の中はいっぱいいっぱいだった。
でも、でも1つだけ聞かなければならないことがある・・・
だからまだここから逃げるわけには、いかないんだ。

僕が一番知りたいこと。

一番・・・

そして僕は顔を上げた。

ゆっくりとおじいちゃんの目を見る。

「おじいちゃん・・・。お、お母さんとお父さんは？」

一拍子、おじいちゃんが間を置いて・・・口を開いた。

「・・・すまんのう、それはわしにも分からのじゃ。でも、これ

だけは言える！お前の母親は・・・生きている！・・・」

おじいちゃんが口をつぐむ。
顔をしかめる。・・・俯く。

悪い予感。

自然と湧き出てくる汗。

早く、早く言って。嫌な予感に僕は逃げ出したくなる衝動に駆られる。

そして、おじいちゃんが・・・

「お前の父親は・・・」

口を開いた。



「あーあ・・・」

今は自分の部屋にいる。

『部屋に帰れ、もう日も落ちた。早く寝て明日に備えなさい』

そう言ったおじいちゃんの言葉にバツと外を見る。

陽も傾き、畑も道も全てがキラキラと赤く染まっていた。

綺麗、その思いと同時にどれだけ長く話し込んでいたかを実感させられた。

「あーあ・・・」

そしてまた1人唸る。もう、唸るしかできない。

おじいちゃんが知っている範囲の都市が破壊された。

それだけでもかなりの数の都市のはずだ。

だって、おじいちゃんは若かったときいろんな所を旅してきた人で何でも知っていたから・・・

陽も完全に落ち、薄暗闇に包まれている窓の外を眺める。

『お前の父親は・・・』

頭から離れない言葉。
頭の中を渦巻く・・・

『死んだ・・・10年前のあの事件で・・・お前の父、マンタは勇敢に戦っていた。決して、決して無駄死にはなかった・・・!!』

思い出はない。

だけど、想いは・・・残っている。

頭ではなくて体が、心が覚えてるんだ・・・
お母さんとお父さんのことを。

「よし。決めた・・・僕は、」

すると目に光の筋が当たる。
外が明るくなってきた。

もう、朝だ。

なんて時がたつのは早いのか。
決意を固めた後の、時間は・・・



「おじいちゃん、話があるんだけどいい・・・？」

起床時間になって、おじいちゃんが部屋から出て来る。
それを見計らって声をかけた。

「・・・心の整理はついたのか？」

「うん」

そう言って2人で暖炉を囲んで座る。
緊張した雰囲気、強張る気持ち・・・

駄目だ、こんな弱気じゃおじいちゃんが認めてくれるわけがない。
そして僕は顔を上げた。

昨日の夜からずっと考えていた。お父さんは死んでしまったけど、
お母さんは生きている。
でも、居場所が分からない。
だからと言って死んでいるかもしれないなんて思えない・・・いや、
思いたくない。

だから、だからこそ会いたいんだ。

僕の中で、僕の心が『会いたい』って叫んでるんだ。

お母さんの口から、お父さんのこととか何が遭ったのか・・・聞きたい。

おじいちゃんの目を見る。

許してくれないかもしれない。

それでも・・・

「おじいちゃん、僕・・・お母さんを探しに行くよ」

「それはならん」

譲れないものが

「僕は行く!!」

「外は危険じゃ! お前が出てっても何にもならんにきまっとるじゃろう!」

今はあるから。

「それでも!・・・まだ、決まったわけじゃない!僕は行く。行かないといけないような気がするんだ!!!!!」

僕は初めておじいちゃんに反抗した。
大切な人を見つけ出すために。

「・・・勝手は許さんぞ」

おじいちゃんは立ち上がり、背を向けた。
僕は慌てて呼び止めようとしたが、次のおじいちゃんの言葉に声が出なくなった。

「いってらっしゃい、気を付けてな」

グツと一気に目頭に熱が集まってくる。

自分の気持ちが届いたこと、お母さんを探しに行けること・・・
でも一番は・・・

「いっ、てき・・・ます・・・」

後姿からもわかる。

おじいちゃん、演技下手すぎるよ・・・

肩が小刻みに震えいて、泣いているのがすぐに分かった。

ハハ・・・もう、ずるいなあ。

そして僕も、涙を流した。

ありがとう、おじいちゃん・・・

僕もおじいちゃんに背を向け、あらかじめ準備していた荷物を持つ。
玄関に立ち止まり、振り返ろうと思ったがやめて外へ出た。

光が目映る

それは、眩しい晴天。

始まりの朝日だった・・・

da「あっつー・・・」

今は昼時、あれから当てもなくひたすら歩いている。

歩きながら思うのは、やっぱりおじいちゃんと町の人たちのことだった。

いきなり飛び出してきたから、みんなきつと驚いているだろうな・

・

そこはおじいちゃんがなんとかしてくれてるのかな？

・・・おじいちゃん、1人で大丈夫かな？

「いや、ダメダメ！今はとにかく進まないと！」

僕は、頭をブンブンと振ってどんどん沈んでいく気持ちを振り払った。

だけど、いつまでも当てもなく歩いていてもゴールは見えるわけがない。

頭の隅では分かっていること。

分かっているけど落ち着いて動かせない自分の体。

「はぁ・・・」

何か疲れたな。

そう思ったときだった。

「あれは・・・町？」

龍王国を出て気が付けば昼も過ぎて太陽が西へ向いていたとき、目に小さな町が見えた。

僕は、当てもなく歩いていたら少しお母さんのことについての情報聞けるかもしれないと思い内心嬉しかった。

「よし！ここは寄り道するしかないな！」

僕はそう意気込んで歩き出す。

別に、町を見つけたぐらいでそんなドギマギしなくてもいいのと思うが、僕にとっては初の旅だ。

小さい頃から畑ばかりの自分の里しか見たことがないから、変に緊張してしまう。

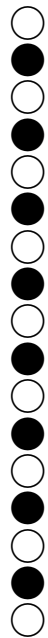
「し、失礼します・・・？」

だから、ほら・・・今みたいに町に入るとき言わなくてもいいのに
“失礼します”なんて言ってるし。
世間知らずだからしょうがないのかもしれないけど・・・

「わぁ・・・」

そして村の中を見渡し思わず声を上げてしまった。
小さな町なのに人人人・・・
本当にたくさんの人に埋め尽くされていたからだ。

こんなに賑わっているのを見るのは、初めてだ。
僕はしばらくその光景をボーっと見つめていた・・・



「あ、あの」

「・・・あら、私に何か？」

「あ、はい。少し尋ねたいことがあるんですが・・・」

僕は今町の中にいる。

さっきまでずっと我を忘れてボーっとしていたが、馬車が通る音が

聞こえて早く聞き込みをしないとという本来の目的を思い出し歩を進めたのだ。

「この人に見覚えはありませんか？」

僕は家から持ってきた写真、つまり家で僕が見つけたお母さんと撮った唯一の写真を見せる。

僕が話しかけた女の人は少しの間考えてから口を開いた。

「この女性ですわよね？どこかで見たような気がするんですが・・・あつ確か、その飲み屋にいらっしゃったような・・・」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！！」

「あ、そこのお方！・・・行ってしまったわりましたわ」

そこにいる。その言葉を聞いた瞬間、僕は女の人呼びかけたのも無視して一目散に駆け出していた。

執
筆
中
・
・
・
・
○
●
○
●
○
●
○
●
○
●

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7619q/>

Boys adventure～少年たちの冒険～

2011年10月8日18時07分発行